

〔書評〕

上田博著 『石川啄木 時代閉塞状況と「人間」』

田口道昭

本書は、『啄木 小説の世界』（一九八〇 双文社出版）、『石川啄木の文学』（一九八七 桜楓社）、『石川啄木 抒情と思想』（一九九四 三一書房）、『啄木について』（一九九五 和泉書院）とこれまでに四冊の啄木研究をまとめてきた著者の五冊目の啄木論である。「序章 石川啄木をどのように呼ぶか」、「第一章 啄木の出現した場所」、「第二章 存在の故郷を求めて」、「第三章 自己という現象」、「第四章 高橋彦太郎のその後」、「終章 小さな検温器を見つめて」の五章からなる。

著者のこれまでの啄木研究は、小説、評論・隨筆、短歌と順になされ、四冊目ではジャンル相互の関係の考察へと進められてきた。本書は、それぞれの作品についての研究論文でも、単なる評伝でもない、「啄木の全体像」をめぐって書いたものであるという。その意味では著者の啄木論の総集編ともいえるべきものである。しかし、それは、単なる個々の研究の積み重ねの延長線上にあるものではない。

著者は、あとがきで次のように述べている。

明治一九年から四五年までの二七年間の最後の二〇年を「石川啄木」として生きた人間の経験を、ぼく自身の内面に再生して生きてみることはないのか。それは又、この国の国家・社会の建設の時代に、「石川啄木」として自己の才能の見極めとその実現のために生きた人間の、実現と挫折と可能を含む全体を、現在の自己全体として生きてみることはないか、と考えたのである。《中略》《石川啄木》とは何かを問うことは、だから、ぼくとは何者かを問うことである。

《傍点―著者、以下同》
いわば、著者の〈実存〉が啄木と対置、もしくは同化されて、啄木像を紡ぎ出しているといつてよい。

例えば、「高山のいただきに登り／ながなしに帽子をふりて／下り来しかな」、「何となく汽車に乗りたく思ひしのみ／汽車を下りしに／ゆくところなし」などの歌を紹介して、著者は言う。

折ふしに、(なにがなしに)、(何となく)、ふらり、ふらりと誘い出されるころには、思索や行為が理由や目的に過剰に拘束される日常から解放されたという気分が貼り付いているのである。理由、目的、意味について考えるのは言葉であって、言葉の中に人間が現われると言わねばならぬ。自分を(実務には役に立たざるうた人)と言ひ、(くだらない小説)を書いて喜ぶ人間と自嘲し、さらには、(ことさらに灯下を消して/まちまちと思ひてみしは/わけもなきこと)とも自己を歌つて、自身が思考過多人間、言葉過剰人間であることを自認する。(《中略》言葉とは何か。言葉を多用し、酷使する人間は言葉から逆襲される。言葉とは一体何者なのか。謎かけは謎かけを呼び込んで、ついには、自分が(人間のかかはぬ言葉)を喋っているのではあるまいか、という疑いの中に落すのである。

「思考過多人間、言葉過剰人間であることを自認」し、「自分は(人間のつかはぬ言葉)を喋っているのではあるまいか、という疑いの中に落す」という、その主語は、石川啄木であり、著者自身である。我々は、本書を(読む)ことを通じて、啄木の内面世界と著者の内面世界を同時にくぐることになる。

しかし、こうした方法は、著者の長年にわたる啄木論の蓄積があつてこそはじめて可能になるものであり、これを単純に真似すれば、啄木自体がおいてきぼりにされてしまい、論者の「感想」にしかならないだろう。本書がそれを免れているのは、著者があ

くまで啄木の生きた時代に身を置きつつ、啄木の視線を共有しながら、その内面世界と対話をするといった姿勢による。このことは、「啄木」が「啄木」となった過程を叙述した第一章、第二章にも明らかである。

「第一章 啄木の出現した場所」は、石川啄木こと石川一が何年何月何日に何処に生まれたかといったいわゆる伝記的な事実を表したのではない。あくまで「啄木が出現した場所」、いわば(原風景)を訪ねたものである。第一節では、啄木の小説「鳥影」(明41)、「刑余の叔父」(明41)、「天鷲絨」(明41)、「赤痢」(明42)などの世界が、正宗白鳥の「二家族」(明41)、「入江のほとり」(大4)などの作品世界と対比されつつ、啄木の精神の原風景が辿られる。第二節では、啄木に影響を与えた高山樗牛、姉崎嘲風の精神的軌跡が辿られ、第三節では、日露戦前後の啄木の精神的軌跡が辿られる。樗牛、嘲風の影響とひとことではいつても、それは単に概念として模倣されるものではなく、同じ時代をどのように生きたのかということ抜きに「影響」は考えられない。本書では、一旦啄木から離れ、嘲風や樗牛の精神的軌跡と日露戦前後の空気が丹念に辿られた後、もう一度啄木の歩みと合流する。

「第二章 存在の故郷を求めて」では、明治三十九年の浜民村代用教員時代と、明治四十年の北海道漂泊時代の啄木の精神的軌跡が辿られる。ここで「精神的軌跡」という言葉を繰り返さざるを得ないのは、著者の方法(「方法」という言葉も、対象を外からみているニュアンスを持ち、著者にとって是不本意だと思われ

るが)、あくまで、啄木の精神と同化しつつ、啄木の人と文学を明らかにするものであるからにほかならない。

さて、浜民村代用教員時代に啄木が執筆した小説「雲は天才である」を論じ、著者は次のように書いている。

明治四〇年五月二日、「噫人生は旅なり。」と日記に記して、啄木は浜民を離れ、北へ向かう旅人になった。「僕は遠い処へ行かうと思つてる」という天野朱雲の声は啄木を導く内面の声であつて、この不思議な関係は、文学の書き手が、逆に文学によつて書き手の内面に深い示唆を与えられる事態を明かしてくれるのである。

表現されたものが、自立性を持ち、表現主体そのものをも動かしていくというこの記述は魅力的である。ほかにも「ぼくらは気安く〈現実〉、〈現実〉と口にすることが憚られて、〈現実〉とは人間の主観の別名であつて、文字はそうしたことの意識的表現行為であると知れるのである」という指摘があるが、著者がこれまで伝記的事実に拘泥するよりも、作品世界をして啄木の原風景を探らうとした理由は明らかであろう。我々は単に「現実」を生きているのではなく、言葉であり、主観であるところの「現実」をも生きているのである。そして、「言葉」と「文学」は、書き手の現実をつき動かしていく。

ところで、啄木は浜民を離れた後、東京へは行かず北海道に渡つてゐる。著者はそれを次のように説明する。

次々に眼前に現われる自然と人との出会いの新鮮な印象が

内面の奥深くまで差し込んで、内面に付着した〈習慣〉の霜を溶かし、生地を純粹を回復してくれることが切望されたのである。〈遠い処〉として北への旅が選ばれたのはこうした内面的な促しによる。近い処Ⅱ〈我〉へ帰つてくるために、〈遠い処〉へと旅立つてゆかねばならなかったのである。著者自身も触れているように、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」が想起される。そして、同じ理由、つまり北海道にあつても「内面の空洞がひろがり、『夢が結べぬ』日がやつてきた」とき、啄木は、東京へ「帰還」することになるのである。啄木がなぜ東京に行かず北海道へ渡つたのか、また、一年足らずのうちに上京したのかという疑問に対する、いわゆる伝記的事実のみからは導き出し得ない魅力的な解答が、ここにある。

「第三章 自己という現象」では、まず「第一節 東京の夜の底で」で、上京後の啄木の苦悶を小説作品『病院の窓』を中心に綴られる。ここでも、小説世界の中に啄木の精神的軌跡が辿られる。そして、「第二節 半分でしか生きていなくて、『一握の砂』と『悲しき玩具』」は本書の中心をなす部分となつてゐる。

著者の関心は、「言葉」と「人間」をめぐる不思議な関係に向けられ、啄木の短歌を通じて考察される。冒頭に紹介した箇所の他に、次のような記述もある。

〈古びた帽子〉や〈去年の袷〉に愛着するのは、身体の匂いが染み、馴染んでいるからだけではない。インク罎や吸取紙、窓のカーテンや染みになつかしさを覚えるのは、人がそ

うした物たちに差し向けることばによつて、人と物の関係の中に彼らを取り込むからである。物たちはこのようにして人間の印を付けられることで、人間の日常の中に溶け込み、(日常)そのものと化すからである。

しかし、「言葉」は、自分から離れていってしまうこともある。

人間のつかはぬ言葉／ひよつとして／われのみ知れること
 〓 思ふ日

筆者は、この歌を紹介しつつ「人と物を結びつけていたことばが物から剥がされ、言葉自体が何か得体の知れぬ存在として感覺される感じ、と言つてはどうか」と述べている。この章では、そのほか、内的な像と外側から見られた自分の像との間の落差に関する感情、日常の中でちよつと気分をずらしたところに生まれる〈自由〉について、回想の虚構などについて、啄木の短歌を辿りつつ考察されている。そして、啄木と短歌の関係は次のような言葉でまとめられる。

啄木は「歌は私の悲しい玩具である」と言い、又「おれはいのちを愛するから歌を作る」とも言った。結局のところ啄木にとつて、歌は自分の内部を明らかにするための必要不可欠のものであつて、歌と人との関係は子どもと玩具とも目ざれて、玩具が子ども的一部分、否、子ども自身であるように手放すことなど思ひも寄らないものであつたのである。

与謝野晶子の『みだれ髪』と石川啄木の『一握の砂』『悲しき玩具』を比べると、前者の方が難解であると答えるのが普通の理

解だろう。石川啄木の短歌が多く読者を獲得したのはその「わかりやすさ」にもよる。しかし、本当に啄木の歌は簡単なのだろうか。著者の啄木の短歌解釈は、このことを問ひかけている。

「第四章 高橋彦太郎のその後」は、小説『我らの一団と彼の登場人物高橋彦太郎と明治四十三年以後の啄木の足跡が辿られる。「明確な現状認識と研ぎ澄まされた自意識」を持ちながら「現状を変えようとする意志を喪つて宙吊りに」なっている高橋は、「僕は誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死んでやらうと思つてる」と言う。この人物の精神的風景と啄木のそれとが重なる。しかし、「人生四六時中、人間のすることなすことすべてに、一一の意義、目的が」「あるあるいはあるべきと考量して、その実現と完璧を目指すところに〈近代〉があると『言えば』、〈何となく〉(何がなしに)といった気分を歌に残さざるを得ない」「近代人の病である」。啄木の病はこのようなものであつたと著者はいう。

この男は、人とつき合つても、本を読んでも、街中の犬を見ても、猫を膝に乗せても、全ては相手と自分との関係の私たちを眺め、そのことに全ての情熱を注ぐのである。このような息苦しい状況の持続に耐えようとする心と体に異変の発生しないはずはない。

「終章 小さな検温器を見つめて」では、このような啄木にとつての〈死〉は、「苦しい自分探しの旅」の終わりであつたとい

〈自分〉という人間のことがいちばん謎であったから、いつも〈自分〉を探していたから、いろいろなものの上に自分の姿が見えたのである。そうして〈死〉が訪れて、ようやく〈自分〉を問う意識が自分の上から離れ去ったのであった。〈自分〉の中を覗き込む自分の〈眼〉の圧力から解かれたのである。その意味では幸福な〈死〉であったか。

おそらく著者の〈自分探し〉はまだ続くのであろう。そして、著者の啄木像は著者自身の人生の深まりと共に、またもや変転を続けるのであろう。われわれは、著者の啄木論からその対象へ肉薄する姿勢と、それが研究主体（単なる研究者でなく）の在り方と無関係でないことを教えられる。

（三一書房 二〇〇〇年五月 二〇三頁 一八〇〇円）

（たぐち・みちあき 神戸山手女子短期大学助教授）